[報告 2　生活活動の現場から]

互助精神で福祉の協同を

あしたあんしんして生き活きと輝いていたい

池田陽子（ＪＡあづみ 総務開発事業部福祉課）

福祉を考えるときには、「誰もがみんな地域で安心して暮らしていける」という視点に立つことが第一だと私は思っている。ＪＡあづみでは、平成 10 年に福祉課を立ち上げたことを機に、「あした、あんしんして暮らしたい」を共通認識とした福祉事業を展開している。

平成 11 年には、農業や福祉、環境のことを学び、それを自分たちの地域で実践していく「生き活き塾」という取り組みを開始した。学びながら実践していくこと、そして自らの手で住みやすい地域を作っていくということがＪＡの本質であり、目的と目標を持った活動を自立的に育ててほしいという願いから生まれた事業である。

そこから誕生したグループのひとつに、「ふれあい市安曇野五づくり畑」がある。「生き活き塾」で農業と食をしっかり学んだ後、地域で小グループをつくり野菜づくりを実践。３～４年目が経ったころ、「良い野菜がとれるようになったから、直売所で売りたい」ということになった。そこで、コンテナ２個とコンパネ１枚を並べて、野菜の直売を開始。塾生なら誰でも参加できることにし、売上の 15%をグループに蓄えることにした。

その蓄えから資金を借りるかたちで、平成 16 年には「生き活き塾菜の花プロジェクト」が立ちあがっている。田んぼを借りて、菜の花の種をまき、その種から油を搾る。それを地域の学校給食にプレゼントしたところ、今度は学校側から「ぜひ学校給食に野菜も提供してほしい」と要望が来た。現在では、じゃがいも、ミニトマト、長ネギ、ほうれん草、小松菜の５つを学校給食に提供している。さらに最近は、行政とタイアップした「ブランドづくり事業」などへ、活動は発展しつつある。

一方、平成 12 年には、ホームヘルパーの資格を持った人や高齢者福祉活動をしてきた人たちを中心に、くらしの助け合いネットワーク“あんしん”が立ち上がっている。これは、介護保険では認定されない部分を対象とした、家の掃除や食事作り、ヘアカット、畑の草むしりなどの有償在宅サービスと、高齢者を対象としたミニデイサービスの２つが柱となっている。

ミニデイサービスは、「みんなで集まってお茶を飲もう」というところから始まったもののだが、現在、ＪＡあずみ管内には、26 ものお茶飲み会場がある。近年、地元商店がどんどん姿を消し、郊外の大型店舗に行く手段のない高齢者たちは、買い物に不自由している。ミニデイサービスの参加者たちから「買い物ができる車をまわしてほしい」という要望が出たため、“あんしん広場”に商品を乗せたワゴン車で乗りつけ、移動販売を行ったところ、大変喜ばれた。

そこで、これをもう少し大きなものにするために、“あんしん”の蓄えから 50 万円、五づくり畑から 120 万円を出して軽トラックを購入し、移動購買車とした。それをＪＡへ贈呈し、“あんしん”へ貸与するというかたちで、現在活動している。いずれも、無理のない、身の丈にあったかたちで活動を発展させていることが成功のカギだと感じている。

このように、活動が地域内でどんどん発展していける土台には、生き活き塾の学習方針がある。生き活き塾の２年間の学習講座のなかでは、座学だけでなく、地域活動への参加を重視している。目的意識と問題意識を持ち、それを解決するために知恵を絞

り、行動へ移す。その訓練の成果が出ているのだと思う。

そして、事務局を担うＪＡの役割は、「誰を対象に、常に何のために、いつ・どこで・どういう仕掛けをしたらよいか」、タイミングを見計らいながら提言したり、援助したりすることが大切だ。

現在の課題は、これまで 10 年続けてきた活動を、今後どうやって継続していくかということ。どんな活動にも山と谷がある。谷に落ち込む前に、次の山に向けて提言をしていかなければならない。そこで私たちは、“100 歳まで農作業で達者が一番“という「あんしんビジョン」を掲げ、活動を見直すことにした。その基礎となるのは、やはりＪＡにとっての組合員教育活動である「生き活き塾」だ。ＪＡと地域の組合員が共に手を携え合い、問題意識を持ち、ネットワークを作り、プロデュースをしながら、ストーリー性を持った楽しい活動をつくり続けていく。それが結果として、安心して暮らせる地域の里を作っていくと確信している。